

弁内侍

ツレ女 梅枝

シテ 弁内侍

男 師直従者

ヲカシ 興丁

ツレ男 内侍従者

ワキ 楠正行

地は 大和、河内

季は 雑

ツレサシ

「是は三位行氏卿の北の御方に仕へ申す。梅が枝と申す女にて候。さても大和の三吉野や。賀名生の皇居におはします。弁の内侍と申す御方は。先帝の宮女なりしが。君雲隠れの其後は。かすかなる御住居にて渡らせ給ふ由聞し召し。せめて慰め申さんと。御迎の其為めに。唯今吉野へ参るなり。そも此内侍は頼みし人の。姪君にてましますが。天が下に並びなき美人にて。呼ばひ渡らぬ人も無きに。かやうに主なき花となり。散りなん後の痛はしさよ。

下歌

「事問ひ給ふ叔母君の。心の奥も白糸の。

上歌

「乱れがましき世の中に。く。誰を頼みて吉野山。花より外は知る人も。あらぬ浮世の山風。誰が身の上に散すらん。く。

詞

「急ぎ候ふ間。吉野に着きて候。是なるが内侍の御座候ふ処の由申し候。まづく案内申さうずるに

て候。いかに案内申し候はん。叔母君の御方より。

梅が枝が御使に参りて候。それく御申し候へ。

シテ「有りし世の宿の気色を訪ふものは。秋の夜の月庭

の松風。実にや木に離るゝ藤。君に後るゝ侍女。

あら便りなの我等が有様やな。

ツレ詞「いかに案内申し候。

シテ詞「女性の声して音なふはいかなる人ぞ。

ツレ「是は都の叔母君より。梅が枝が御使に参りて候。

シテ「あら思ひ設けずや。何の為の御使ぞ。殊に梅が枝

ならば此方へ来り候へ。

ツレ「是は御声にて候。遥に見奉らず候へば。いよく

およすげおはしまし候。御文の参り候。是々御覧

候へ。

シテ「あらうれしや母君には捨てられ。今は叔母君をこ

そ。親とも思ひ参らするに。御消息の珍しや。ま

づく御文を見うずるにて候。遥にこそ渡らせ給

へ。山里の御住居。さこそと思ひ参らせて。殊に
袂をしぼりあへず。御恋しさのいとせめて。住吉
へまうで侍りし程に。道の便りも然るべければ。
逢ひ奉らん事を思ひ。河内の国高安に。知る人あ
りて参り候。待ち奉るばかりなり。かゝる乱れの
世の中に。又逢ふ事も片糸の。よるべぞ急いで御
出であれ。奥に一首の歌もあり。逢ひ見んと思ふ
心を先立てゝ。袖に知られぬ道芝の露。

地「実に珍しやなつかしや。朝夕恋ひし叔母君に。見々
えん事のうれしやと。使とつれて侍女二人。く。
青侍を二三人。忍びて出づる仮輿の。道のさかし
きも。逢ふを便りの心にて。急ぐ行方の道遠し。
く。

男詞「や。是は弁の局にてましますか。叔母君はかへり
申しの事有りて。まだ住吉へましますなり。あれ
へ御輿をなし申せ。

シテ「其住吉とは津の国の。青きが原の遠き境。それは
遙かの旅の道。かりそめぶりに行きがたし。まづ
く吉野へ立ち帰り。重ねてこそは参るべし。早々
輿をかきもどせ。

ヲカシ「畏つて候ふとて。お輿を跡へ舁きもどせば。

男「いや是非共にと引つ立てゆく。

ツレ男「狼籍なりと制すれば。

地「大勢中に取り込めて。供の侍切り伏せ。御輿を中

に飛ばせつゝ。遙に道を行き過ぐる。く。

ワキ詞

「是は河内の国楠帯刀正行にて候。吉野殿へ召され
候ふまゝ。唯今参内仕り候。や。向ふより女輿と
見えて来り候。皆々道をよけて通し候へ。あら不
思議や。今の輿の内にて。女の泣声いかさま子細
候ふべし。其輿待てとこそ。其輿の内の女つれて
来り候へ。や。是はやんごとなき御方にて候ふが。
いかなる謂れにより御愁歎候ふぞ。子細を御物語

り候へ。

シテ「是は吉野先帝の宮女。弁の内侍と申す者にて候ふが。叔母君河内の高安とやらんに居ますとて。対面の為めとて行き向ふに。荒けなき男子共まうで来て。わらはが家人を害し。かやうに奪ひ参る程に。いと恐ろしく鬼にとらるゝ心して。かくまで歎き侍ふなり。

ワキ詞

「あら御痛はしや。さては弁の内侍にて御入り候ふ

かや。いかさま子細有るべし。あの狼藉者ども一々召し捕り候へ。さて其迎の女とは汝が事か。いかさま子細有るべし。真直に申し候へ。少しも偽らば重く曲事すべし。急いで語り候へ。

クリ地

「今は何をか包み参らせ候ふべき。内侍の御事をいかにして聞き及び給ふらん。高の師直色好み給へば恋ひ渡り。叔母君をすかし給ふ。

ツレサシ

「其前度々艶書通ひしかども。

地

「更に承け引き給はねば。行氏卿の北の方を。ひたすらにたのむの雁の。数々の所知賜はらん。官位をも進め参らせんと。様々頼ませ給ふにより。今の世の恐ろしさ。又内侍の御為めにも末頼もしくや有るらんと。わらはにも禄賜はり。たばかりごとの御使なり。召し捕り給ふ力士は。師直の御家人御迎の者なり。我等とても中々空恐ろしく思へども。否といはゞ稲舟の。いかなる目にか逢ふべ

きと。はるぐ参り向ふなり。此上の身の科を許し給へと手を合す。

シテ

「我はかくとも白波の。

地

「只盗人の手に渡り。如何なる目にか逢坂の。せきあへぬ涙の色。知ろしめしてかくまで。はからひ給ふ正行は。唯氏の神と覚ゆると。御悦びはことわりや。

ワキ詞

「今こそ子細を承りて候へ。誠に参り合ひ奉らずは。

敵の手に入り給ふべし。かしこう行き合ひ奉りて候。いかなる者ぞと存じて候ふに。さては師直が下人共にて候ふか。誰かある一々頭を刎ね行路に晒し候へ。早御急ぎ候ふ程に。是は勝手の御宝前にて候。是もひとへに仏神の御加護なれば。此拝殿にて法樂に一指御舞ひ候へ。

シテ「恥かしながら返り申すも。誠に諸神の恵みなれば。昔し静の舞の衣装。烏帽子を暫し仮に着て。

五節の袖を思ひ出の。袖を返して舞ふとかや。

地「しづやしづ。(舞)

シテ「しづやしづ。しづのをだまきくり返し。

地「昔を今にくり返し。君を都に還幸なして。我身も供奉し奉らんと。祈る真袖を翻へし。かへる心もいさみある。楠と伴ひ二たび皇居へ。立ち帰るこそうれしけれ。

